パクリタキセル前投薬統一後の評価

通院点滴療法室　浅　場　　香　千　装　真由美

Ⅰ．目　的

近年，がんの化学療法は患者のＱＯＬ向上を目標に，外来診療で行われることが多くなった．通院点滴療法室の開設時，パクリタキセルにおいては５つの診療科で前投薬の方法，投与時間が異なっていた．作業は煩雑となり，ヒューマンエラーをおこしやすい状態であった．そこで，リスクマネジメントとコスト削減の視点に基づき，各診療科医師，担当薬剤師とともに前投薬の統一をはかり成果を得ることができた．ここで，パクリタキセル前投薬統一後の８ヶ月を振り返り，その有用性を検討したので報告する．

Ⅱ．方　法

パクリタキセルを含むプロトコールの化学療法をうけた患者の診療録及び看護記録をもとに，レジメン変更後８ヶ月（2007. 7. 11～2008. 3. 11）間の，パクリタキセルによるアナフィラキシーショックの発現の有無，患者在室時間，デバイス費を調査．

Ⅲ．結　果

パクリタキセルを含むプロトコールは，通院点滴療法の実施件数の約４割をしめる．調査期間をとおしてアナフィラキシーショックはみられなかった．患者デバイス費は８ヶ月間で約32万円の減少となった．実施時間も統一されたが，１つのプロトコールで30分延長した．しかしながら，患者の在室時間は短縮され，ベットコントロールがしやすくなった．

Ⅳ．考　察

前投薬が統一されたことで，コストを削減することができた．また，煩雑な確認作業が簡便になったことより作業時間が短縮した．捻出できた時間は，患者の症状マネジメントやセルフケア支援のための時間に使うことが出来るようになり，がん化学療法が確実に，安全に，安楽に行われることを支えていけるようになった．

Ⅴ．結　語

近年のがん医療の発展に伴い，標準治療が確立された分野や分子標的薬治療薬も次々と登場している．がん化学療法が確実に，安全に，安楽に行われるためには，前投薬や制吐剤の使用方法等を含めて，リスクマネジメントの観点，コスト削減の観点を持ち合わせて現状に見合ったプロトコール改定作業をする必要性がある．そのためにはエビデンスを持ち寄り，多職種協働で作業をすすめることが必要であると考えられる．